

—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

エジプト：内相暗殺未遂事件実行犯の映像発表

2013年10月26日、「エルサレムのアンサール団」を名乗る団体が、イスラーム過激派が広報に用いる掲示板サイトで、エジプトのイブラーヒーム内相暗殺未遂事件（9月5日）の実行犯のワリード・バドルなる人物の演説を含む映像を発表した。同派は既にイブラーヒーム内相暗殺未遂事件の犯行声明・爆破場面の画像を発表しており（9月8日）、今回の映像は、この作戦が同派によるものであることを裏付けるとともに、今後同派がいかなる攻撃対象を優先するのかを知る上で重要な資料となる。この映像で注目すべき点は、以下の通りである。

1. ワリード・バドルの来歴

映像に挿入された字幕によると、同人は1991年にエジプト軍の士官学校を卒業した。しかし、同人は少佐に昇進したものの、イスラーム主義的な思想傾向がもとでエジプト軍を解雇された。その後、同人はアフガンに渡り、そこでのジハードに参加し、さらにはイラクに潜入してジハードに参加しようと試みた。ただし、イラク潜入の試みは失敗に終わり、同人はイランで逮捕され約1年収監された。そして、いったんエジプトに戻り「ムジャーヒドゥーンの同胞たち」とともに過ごした後、シリアに潜入、「バース・ヌサイリー体制」（注：アサド政権を指す）との戦闘に参加した。ワリード・バドルは、こうした経歴を経てエジプトに戻り、イブラーヒーム内相襲撃の「殉教志願者」に選抜された。

2. 「エルサレムのアンサール団」の主張

ワリード・バドルの演説や映像中の字幕、挿入されたザワーヒリーやアブー・ムハンマド・アドナーニー（＝「イラクとシャームのイスラーム国」の報道官）の演説は、エジプト軍を敵視する内容で占められた。ワリード・バドルはエジプト軍の要員に対し、背教者であるエジプト軍に加わっている限り攻撃を受けるとして、悔悟するよう要求した。また、映像の終盤で、「エジプトの軍・警察の拠点は我々の正当な標的であり、ムスリムにはこれらに近づかないよう呼びかける」との字幕が表示された。

（考察）

ワリード・バドルの来歴で注目すべき点は、「同人がイラク潜入を試みて失敗した」という点と、「シリアに潜入したがエルサレムのアンサール団の作戦行動のためにエジプトに戻った」という点である。前者が示すことは、ワリード・バドルがイラクで活動していたイスラーム過激派諸派と緊密な人的繋がりを持っていない、あるいは、同人はアル=カーイダなどの組織の

正規の構成員ではなかったという事実である。イラクにおけるイスラーム過激派の活動については多数の観察・分析が発表されているが、中でもイラクへの戦闘員の潜入については、「出身地で事前に潜入経路・受け入れ団体を決定していない者の潜入は成功しない」ということが明らかになっている[『中東研究』516号 2013年 85-86頁]。従って、ワリード・バドルがイラク潜入に失敗したという事実は、同人はアフガンでの戦闘に参加したといえども、イスラーム過激派の有力な活動家ではなく、イスラーム過激派の組織や活動家とも強い繋がりを持っていなかったことを示している。一方、同人はシリアに潜入し、戦闘に参加した後、エジプトでの作戦行動のため帰国している。この事実は、「エルサレムのアンサール団」が自派の構成員をシリアに派遣したり、呼び戻したりできる「潜入の経路」を確立したことを意味する。

また、「エルサレムのアンサール団」は、エジプト軍に対する非難や攻撃扇動を繰り返したが、同派は本来シナイ半島で活動し、対イスラエル攻撃を企ててきた。しかし、今般の映像を含む最近の同派の広報活動は、エジプト軍によるシナイ半島でのイスラーム過激派などの摘発活動を、「イスラエルに与してムスリムを害する行為」とみなし、エジプト軍との戦いを優先的な関心事項としていることを示している。こうした傾向は、「武装闘争の本来の敵として十字軍・イスラエルがあると考えつつ、これらの勢力に与する地元の政府などを攻撃する」という点で、アル=カーイダの思想的傾向に符合する。ただし、同派はアル=カーイダに明示的な忠誠表明を行っておらず、ザワーヒリーらアル=カーイダの側からも、同派に言及したり、過去に同派が実行した作戦行動を賞賛したりしたこともない。従って、イスラーム過激派の中での現時点での「エルサレムのアンサール団」の位置づけは、「アル=カーイダと思想的な類似・親和性があるものの、組織としてはアル=カーイダの傘下にはない」というものとなろう。「エルサレムのアンサール団」の活動は、イスラーム過激派の本来の敵である十字軍やイスラエルではなく、地元の国家権力(=エジプト)との戦いに没入してしまう可能性もあることから、明示的な忠誠表明やその受け入れ、という手続きを確認しない状態で、同派を安易に「アル=カーイダ“系”」とみなすことは避けるべきであろう。

最後に、ワリード・バドルがシリア潜入を経てエジプトでの作戦を実施したことの重要性を指摘したい。シリアに潜入した戦闘員が、経験をつんだ後に出身国で治安上の脅威となる可能性は、こうした戦闘員の送り出し国であるヨーロッパ諸国で警戒されてきた。今般の事例は、「シリア経験者」が出身地での武装闘争要員として「活躍」した典型的な事例であり、エジプトに限らず、シリアにイスラーム過激派戦闘員を送り出したあらゆる国で、類似の事件が発生しうることを示している。

(イスラーム過激派モニター班)

---

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799